

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第2号

石清水型削器小考
桑波田 武志

南九州貝殻文系土器に見られる地域性について
黒川 忠広

田村式土器とその周辺 (覚書)
横手 浩二郎

上野原遺跡第10地点における石材選択について
八木澤 一郎

「成川式土器」の器種組成について (予察)
—杯形土器の様相を中心に—
相美 伊久雄

古代官衙の立地
—古代の官衙は、鹿児島ではどのようなところに置かれたか—
繁昌 正幸

鹿児島県における荘園遺跡研究の現状
中村 和美

鹿児島県における古代の鍛冶遺構について
川口 雅之

墨書土器の性格
—鹿児島を例として—
坂本 佳代子・岩澤 和徳・松田 朝由

鹿児島県における中世煮炊具の様相
上床 真

島津本家における近世大名墓の形成と特質
松田 朝由

溝状遺構の一性格
東 和幸

《実践報告》 出土木製品保存処理の現状と課題
永濱 功治

平成14年度 埋文センター年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2004. 3

『縄文の森から』第2号 目次

石清水型削器小考	桑波田武志 …………… 1
南九州貝殻文系土器に見られる地域性について	黒川 忠広 …………… 11
田村式土器とその周辺 (覚書)	横手浩二郎 …………… 19
上野原遺跡第10地点における石材選択について	八木澤一郎 …………… 23
「成川式土器」の器種組成について (予察)	相美伊久雄 …………… 29
古代官衙の立地	繁昌 正幸 …………… 37
鹿児島県における荘園遺跡研究の現状	中村 和美 …………… 55
鹿児島県における古代の鍛冶遺構について	川口 雅之 …………… 63
墨書土器の性格	坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由 …………… 71
鹿児島県における中世煮炊具の一樣相	上床 真 …………… 81
島津本家における近世大名墓の形成と特質	松田 朝由 …………… 91
溝状遺構の一性格	東 和幸 …………… 109
《実践報告》出土木製品保存処理の現状と課題	永瀨 功治 …………… 117
平成14年度 年報 ……………	121

研究紀要

田村式土器とその周辺（覚書）

横手 浩二郎

A Survey of Potteries Related to Tamura-type ones (Memorandums)

Yokote Kouziro

要旨

最近の発掘調査事例の増加に伴い、押型文土器様式後半期に位置づけられるとされるいくつかの新しい押型文土器が出土している。これらは、従来その時期に位置づけられてきた田村式土器などとは特徴が異なるとされ、その評価が問題となっている。本稿では、これらの土器型式が田村式土器の地域的小変異型式である可能性を大雑把ながら指摘した。

1 はじめに

縄文早期前半の西日本全体に広域に分布した押型文土器様式について、九州における研究の基礎は大分県地域での調査成果から導き出されたことは言を待たない。その後九州においては、警鐘を鳴らされつつもこの大分県地域での研究成果を援用する形で各地域の押型文土器が研究されてきたが、ここ 10 年ほどに到来した大型開発に伴う調査例の増大により、従来の援用方式では整理しきれない押型文土器が出土してきており、これらの取り扱いが課題となっている。

本稿で主に取り上げる田村式土器は、九州の押型文土器様式後期に位置付けられ、筆者が以前取り扱った手向山式土器の一時期ほど前の土器型式である。先述した新しい押型文土器のいくつかの型式がこの田村式土器に並行する型式であるとされており、これらの新しい土器群についての評価いかんによっては、田村式土器の型式概念の範疇や九州における押型文土器様式文化後半の性格づけを左右する可能性を含んでいる。今回は、筆者の勉強不足のためこうした課題に具体的に踏み込むことはしていないが、自分なりの見通しを述べておきたい。

2 田村式土器の型式概念（第1図）

田村式土器は、大分県大野郡朝地町田村遺跡出土の押型文土器を標式資料とする。賀川光夫により設定された当初の概念は「器形は粗大化し、文様も器形同様粗大化する。口縁部が大きく外反し、やや胴部が誇張され、底部がさらにとがる傾向を示す」というもので、当時近畿地方で知られていた高山寺式土器との関係性が想定されていた（賀川 1960）。その後しばらくの間、田村式土器はこの型式概念で説明されていたが（賀川 1971, 1982 など）、大分県直入郡荻町寺の前遺跡の報告書作成を行った高橋

信武と後藤一重は、出土した田村式土器に乳房状尖底のものがみられず、丸底と平底のみがみられたことに注目し、先行する下菅生 B 式土器のなかに丸底化の傾向が見られることを踏まえ、「粗大楕円文を主に施した外反口縁をもち、丸底底部を主体とするもの」と再定義している（後藤 1983）。また後藤は、押型文土器について、施文原体の大きさや器形の変化にくわえ施文原体の回転方向や口縁内面文様との相関関係に注目して分類する手法により田村式土器前後の型式変化にも論及しており、型式内容の深化が図られている。坂本嘉弘は賀川以来の押型文土器研究を継承しつつ西日本各地との並行関係に留意した研究を行っており、「口縁部が外反し、外面は縦回転の粗大化した押型文が施文され、内面は外反する口縁部に沿って長く伸びる原体条痕が付けられた丸底の土器」と定義している（坂本 1988）。さらに坂本は先述した寺の前遺跡の報告にある後藤の押型文土器の分析を紹介するなかで、田村式土器が楕円文だけでなく山形文も型式内容に含まれることを指摘した点を評価している（坂本 1998）。

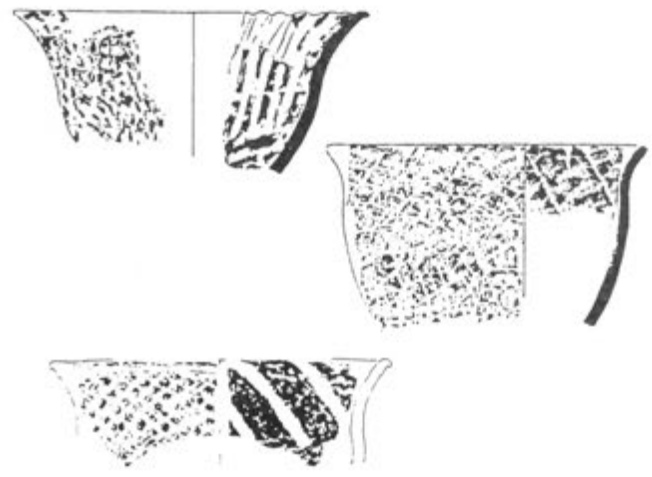
この他、可児道宏は、押型文土器様式について、関東地方において押型文土器に先行する多縄文系土器様式との関係を基点として、施文方法と施文原体の変化を軸に I～V 様式に分類し概説するなかで、田村式土器を第 IV 様式に所属させている。そして高山寺式土器と型式学的近似性が見られることから、この時期に押型文土器様式がもっとも広範かつ均一な分布圏を形成したと指摘している（可児 1989）。また、水ノ江和同は九州における押型文土器の地域性を論じる中で田村式土器についても触れており、和田秀寿の研究（和田 1988）を踏まえて特に口縁部内面の斜行沈線文の長さや口縁部の外反度合い、底部形態などから新旧 2 段階に細分できる傾向があることを

指摘している(水ノ江 1998)。

以上、田村式土器の研究史を簡単に振り返ってみた。およその型式概念として、器形は「口縁部は外反し、胴部はやや膨れているものもあり、丸底ならびに平底」で、文様は「外面には粗大な楕円文中心に山形文を縦走基調として不規則方向に施文し、口縁内面には2段ないし1段の長い斜行沈線文を施文するか外面と同じ押型文を横位に施文する」とまとめておきたい。



第1図 田村式土器



第2図 高山寺式土器

3 高山寺式土器について (第2図)

次に、田村式土器との近縁性を指摘されている高山寺式土器についてもごく簡単に触れておきたい。といっても、その研究史は古くかつ他地域との関係も深いため、ここではごく概説的な程度にとどめる。

高山寺式土器は、和歌山県田辺市稲成町高山寺貝塚出土の押型文土器を標式資料とする。守屋豊人の紹介では、器形は「口縁部が大きく外反し、胴部がふくらむ尖底の深鉢で器壁が厚く胎土中に繊維を多量に含むものが多く見られる」とされ、文様は主に楕円押型文で山形押型文もあり、ほかに撚糸文などがあり、それらを外面に縦位に密接施文するほか「幾重にも重なった粗い手法」で施文しており、内面には斜行沈線が多く施文されるという(戸沢光則編 1994)。この高山寺式土器について、和田秀寿は、内面の斜行沈線文の断面形状と施文手法の関係から細分編年案を提示しており、そのなかで斜行沈線文発生の契機が九州地方からの影響によるものと想定している(和田 1988)。

このように、田村式土器と高山寺式土器との間に近縁性が認められることは、いまさら筆者が述べるまでもなく先学諸氏によって追究されてきていることである。さらに、最近坂本によって論じられているようにこうした近縁性が早水台式期からみられるのであれば(坂本 1995, 2000)、押型文土器様式後半期においては、その

分布圏における文化的紐帯が強固なものであったことがうかがわれ、その強さが九州において押型文土器様式の定着にどう作用し、また一方で在地土器文化にどう受け止められたのか、さまざまに想像されるところである。なお、こうした議論については柴畑光博(柴畑 1993, 1997 2002)や八木澤一郎(八木澤 2001)、黒川忠広(黒川 2003)、堂込秀人(堂込 2003)らによって一端があきらかにされつつある。

4 ヤトコロ式土器について (第3図)

さて、ここで大分県域の研究により田村式土器の後に位置づけられているヤトコロ式土器についても、ごく簡単にまとめておきたい。

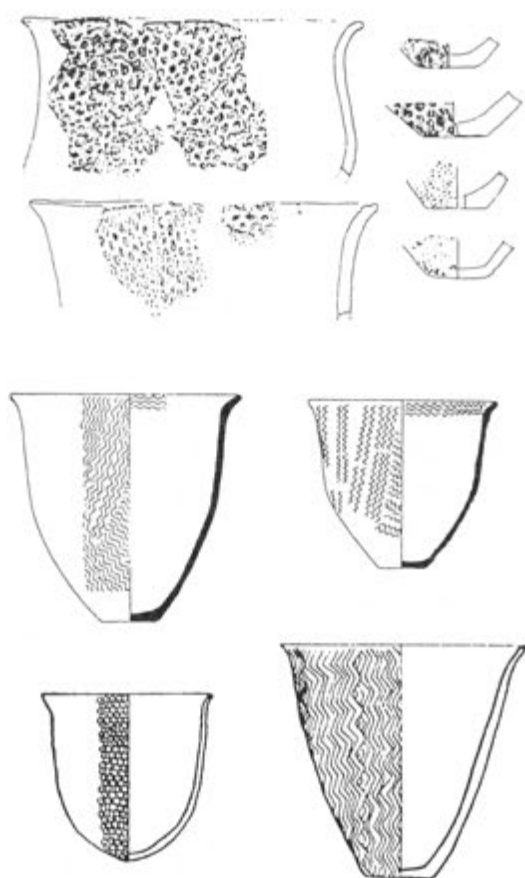
ヤトコロ式土器は、大分県竹田市ヤトコロ遺跡出土の資料を標式とする。設定者の賀川は、当初「口の部分が外反し、底部平らな深鉢の全面に刻み目の深い押型文を横走する」としていたが(賀川 1965)、のちに「外反する口縁をもち、押型文が粗大化(山形・楕円)し、縦走施文が顕著となる。底部は平底となり、押型文土器の終末、円筒形土器への移行の時期が考えられる」と再設定している(賀川 1982)。また、近年では橋昌信が、器形は「口縁部が外反し、胴部がやや膨らみ、平らな底部の深鉢」で、文様は「楕円文と山形文とにほぼ限られ、それらが全面に縦方向で施文されており、整ったものと粗大なものの両者が認められる。」とし、田村式土器までに見られた口縁内面の原体条痕文や外面の横走施文はみられない、と紹介している(戸沢光則編 1994)。さらに、遠部慎により標式資料の見直し作業がなされている(遠部 2000)。

このヤトコロ式土器については、衆知のように型式の存在をめぐって議論がある。水ノ江和同は、ヤトコロ式土器設定当時の学問的背景と現在判明している事実とが乖離していること、現在までにヤトコロ式土器が安定して存在することを示す資料が見当たらないことを指摘し

「従来のヤトコロ式土器の概念は田村式土器に組み込まれるべきであり、田村式土器の新しい段階の山形押型文土器として再認識するのが妥当と考えられる」として、型式の存在を否定する見解を述べている(水ノ江 1998)。また、以前筆者も手向山式土器を扱うなかで「この土器は、本稿で1式としたものと、重複ないし強い近縁性を持つものである」としてヤトコロ式土器の存在に否定的な見解を述べた(横手 1998)。

確かに水ノ江の提示した問題点は説得力があり、先にあげた遠部の論考でもこの点に関する検討はみられない。また遠部の説に従った場合、ヤトコロ式土器は出水下層式土器(河口 1958, 岩崎・堂達 2000)とほぼ同一の型式概念を有する型式となり、それなりに把握されてきた従来のヤトコロ式土器の型式概念から、胴部が膨れる器形の一群が外れてしまうことになる。一方水ノ江の見解では田村式土器の細分の方向性と氏の述べる「新しい段階」に斜行沈線文がない点についての説明がみられない。筆者自身にしてもかつて述べた見解を具体化する作業を行っていない。

無責任な評論のようになってきたが、ヤトコロ式土器についてはさらに検討がすすめられそうである。



第3図 ヤトコロ式土器

5 田村式土器期の九州 (第4図)

ここでは田村式土器に並行する地域的な押型文土器として扱われている、沈目式土器と岩清水式土器について木崎康弘の論考をもとに軽く触れておきたい。氏の論から、沈目式土器は、「直口もしくはやや外反した口縁部であり、平底の底部となる深鉢型の器形で、文様は押型文を外面では全面もしくは上半部に施文し、口縁内面では原体条痕のみ、横位施文押型文のみ、原体条痕と横位施文押型文の3種類を施文する」とまとめられ、石清水式土器は、「上げ底の平底と丸みのある胴部から外反しながら口縁部へ至る」器形で、「口縁近くに横直線があるほかは、口縁部より底部までの全面に山形連続文が施され、口縁内面にも同種文様がつけられている」とまとめられる。どちらも中九州西部に分布する型式とされ、沈目式土器と田村式土器、石清水式土器と手向山式土器が並行関係にあるとされている(木崎 1995, 1998)。

またこの他、最近では宮崎県南部を中心とした地域において、特徴のある押型文土器群が紹介され、田村式土器を含む押型文土器様式後半期に位置付けられている(柳田 2003 など)。



第4図 田村式土器並行期の押型文土器

6 押型文土器後半期の「地域性」をどう考えるのか

以上、先学諸氏の論考に依拠しながら田村式土器とその周辺の土器型式についてまとめてきた。ここでは、今回の作業から得たことを、不明を承知で述べてみたい。

従来、田村式土器期は、九州の押型文土器文化が地域性を持った時期であると考えられてきたようである。その背景には、田村式土器とヤトコロ式土器との型式学的な分別が十分になされていなかったことや、大分県域を中心に構築された押型文土器編年案を安易に他地域に当てこむことへの反省の念、そしてそれに基づく地域性の主張などがあったように思われる。

しかしながら、田村式土器は、高山寺式土器とほぼ同じ型式内容をもつ土器文化であり、坂本が論じたように、瀬戸内海を介した広域かつ均一的な土器文化ネットワークの上に成立した土器型式であることが明らかになってきた。ならば、先に筆者が述べたように田村式土器期における土器文化構造はそれなりに確固としたものがあつたと考えられ、南九州貝殻文系土器文化への押型文土器文化情報の浸透が田村式土器期以前に始まっていたことも考え合わせれば、田村式土器期やその次の手向山式土器期に至ってその構造が急速にほぐれて地域化するというのは考えにくいように思われる。逆に、極論かもしれないが、沈目式土器や出水下層式土器、宮崎県南部域の土器群などは、これまで論じられてきたこととは異なる意味においての田村式土器の地域的な小変異現象を示すとは考えられないだろうか。

7 おわりに

我ながら粗く危うい見通しであり、田村式土器の概念や内容、「地域的小変異」の意味など、これから詰めねばならない課題は山積している。今後、遺物に即し、諸氏の研究に学びつつ、踏み込んでいくことにしたい。

【引用・参考文献】

- 岩崎新輔・堂込秀人 2000 「出水貝塚」『出水市埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
- 遠部 慎 2000 「ヤトコロ式土器と出水下層式土器の関係」『九州旧石器』第4号
- 賀川光夫 1960 「早期縄文式土器の新資料—大分県直入郡荻町政所遺跡出土—」『考古学雑誌』46—3
- 1971 『大分県の考古学』
- 1982 「政所馬渡」『別府大学付属博物館』
- 可見道宏 1989 「押型文系土器様式」『縄文土器大観』1
- 河口貞徳 1958 「出水貝塚」『鹿児島県文化財調査報告書』第5集
- 木崎康弘 1995 「無田原遺跡」『熊本県文化財調査報告』第148

集

- 木崎康弘 1998 「中九州西部押型文土器の編年」『九州の押型文土器—論攷編—』
- 黒川忠広 2003 「南の押型文土器」『利根川』24・25
- 柴畑光博・上田耕・雨宮瑞生 1993 「貝殻文円筒形土器と押型文土器の関係」『南九州縄文通信』No.7
- 柴畑光博 1997 「南九州貝殻文円筒形土器の終焉(予察)」『第9回人類史研究会 研究発表資料』
- 2002 「考古資料からみた鬼界アカホヤ噴火の時期と影響」『第4紀研究』41—4
- 坂本嘉弘 1995 「西日本の押型文土器の展開—九州からの視点—」『古文化談叢』35
- 1998 「東九州の押型文土器研究の現状と課題」『九州の押型文土器—論攷編—』
- 2000 「早水台式土器の成立と展開」『九州旧石器』第4号
- 高橋信武・後藤一重 1983 「荻台地の遺跡」『大分県直入郡荻町所在遺跡群発掘調査報告書』
- 堂込秀人 2003 「南九州における押型文土器文化期の存在」『利根川』24・25
- 水ノ江和同 1998 「九州における押型文土器の地域性」『九州の押型文土器—論攷編—』
- 八木澤一郎 2001 「上野原遺跡 第10地点」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(28)
- 柳田裕三 2003 「通称「イチゴ」という名の押型文土器」『利根川』24・25
- 横手浩二郎 1998 「押型文土器様式最末期の様相」『古文化談叢』41
- 和田秀寿 1988 「縄文早期高山寺式土器の成立過程と細分編年」『古代学研究』117
- 戸沢光則編 1994 『縄文時代研究事典』

【図出典一覧】(図はすべて縮尺不同、出典より一部変更)

- 第1図 戸沢光則編 1994 「田村式土器」『縄文時代研究事典』
- 第2図 和田秀寿 1988 「縄文早期高山寺式土器の成立過程と細分編年」『古代学研究』117
- 第3図 戸沢光則編 1994 「ヤトコロ式土器」『縄文時代研究事典』
- 遠部慎 2000 「ヤトコロ式土器と出水下層式土器の関係」『九州旧石器』第4号
- 第4図 木崎康弘 1995 「無田原遺跡」『熊本県文化財調査報告』第148集
- 岩崎新輔・堂込秀人 2000 「出水貝塚」『出水市埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
- 柳田裕三 2003 「通称「イチゴ」という名の押型文土器」『利根川』24・25